

## 友人はモンスター

木坂 広一

後継ぎの飯島誠一は真面目一方だが弱みを抱えていて、恥をさらけ出すことを恐れていた。実家の仕事は精巧な機械の部品の製造で、海外にも輸出しており、評価が高く、社員も熟練した人がそろっていた。妻の信子はよくできた女で一女を育てており、申し分のない夫婦と言っている。三十八歳の飯島は不倫をするとか、ギャンブルや酒の依存症になるようなことはまずなさそうだ。弱みと言うのはトラウマのことで普段は何とかうまく具合に飼いならしているから問題はない。この病を背負わされたのは学生時代に一つ上の先輩小山田宏と付き合い出してからである。最初はどんな奴か知らなかったが、親密になればなるほど毒を垂れ流すのだ。そのいつのことを悪魔と呼んでもいい。しかし彼は悪魔の顔つきをしているわけではなく、至って平凡であり、また善良でもあったが、気がつかないうちに徐々に浸食されていった。

小山田と最初に会ったのは、渋谷にある日本学院大学の映画研究会である。大学は夏休みだが、その日は

映研の会合があつて、溜まり場の部室に出かけた。西日の射す暑い日で、小山田は上半身裸になって、東京2020年と書かれたタオルを首に巻いていた。その風体は見事なほど絵になつていて、さすがに部長が見かねて、

「ここは東京のだ真ん中だ。そんな恰好をする奴があるか。もうすぐに女子も来るぞ」

声を荒げて叱った。道路工事をしている作業員だつて、もつとまじだろう。初対面の飯島も妙な感じを持つた。それから一時間も経たないうちに小山田は親しみのこもった口調で話しかけて来た。

「飯島、君は地方の百姓の出だろう」

「どうしてですか」

「そう見えたからさ」

「自分たちは大田区で工場をやっています」

「じゃあ、親父さんは工具かい」

「発想が変ですよ。一応は経営者です」

小山田はへえーと言つて、俺は北海道の百姓の倅だ

けどなど笑った。

「今は農家のことをそんなふうには言わないですよ。百姓は差別用語ではないけど、放送禁止用語です」

「そうかい、知らなかったな」

後で分つたのだが、彼は階級コンプレックスの塊のような男で、その心理は度を越していて、しかしそれがきっかけで親しくなつて、まわりついてくるようになった。誘われるままに映画や喫茶店やスナックに出かけ、無論部員全体で行動することもあった。ある時、渋谷の繁華街で知らない女二人と親しくなり、先方もその気になってくれてラブホテルに行った。ところが何やら問題が発生したらしく、飯島が隣の部屋で奮闘していると、ドアをノックする音がした。開けると小山田が阿呆面して突つ立っていた。

「飯島、俺、女に侮辱されたよ」目をキョトキョトさせている。

「侮辱だつて」飯島は苛立たしげに言う。

「あの女、へそを曲げちゃつてね」

「小山田さんに問題があるだろう」

隣室に行くと、女はベッドから離れて着替えながらこぼした。

「だって、この人つたら、親戚に社長をしている叔父

さんがいるって言いだすの」

飯島は女の何でもなさそうな言葉に反応した。

「その気持ち、よく分かるよ。あなたは鋭いね」

飯島は彼女に好感を持ち、同時に小山田の軽薄な言動に白け、バカな男だと軽蔑した。おそらくセックスの最中に発したのだろう。

「小山田さんはコンプレックス丸出しだね」

「事実を話しただけだよ」

「あまり自分の出身階級にこだわらない方がいいよ」

「出身階級つて？」女が聞いた。

「彼は農民の出であることを気にしていてね」

「そんなこと気にすることじゃないわ」

女はおかしな人だという顔つきをして笑った。飯島は健康な笑い声に共感した。

その時は少し救われたが、四人は黙り込んで別々に旅館を出た。

小山田の口から何が飛び出すか知れたものではない。

まだ慣れていない頃、家に遊びに来たことがあった。

姉の文江がお茶を出し、菓子を食べながら雑談をした。

小山田は性格のいい身内に好ましい印象を抱いてくれ、文江も後から小山田のことを、「面白そうなお友達

ね」と誉めてくれた。それでいて後日、姉の話題にな

った時、許し難い言葉を口にした。

「お前の姉貴、誰とでもやらせそうな女だな」

これには啞然とした。まだ先輩として距離があるから、下手に反論したり感情的になつたりするのを避けていた。二、三日してやっと抗議したら、

「俺、そんなこと言わなかつたぞ」

「いや、言いました」

「何か知らないが気にしないことだ」

「気にするなだつて。無責任だなあ。いくら何でも頭に來ますよ」

「忘れるよ」

「忘れません」

結局、うやむやになつてしまつた。それでも絶縁せずにはすんだのは、小山田にもいい面があり魅力があつたからだ。もつとも小山田に対して誰しも呆れていて、同好会の先輩や同輩と話している時に、

「小山田君は空想虚言症とか、演技性人格障害とかじやないかな」

誰かが知つたかぶりで言いだし、それがきっかけで色々のクセを指摘し、案外人を見ているなど感心した。「なるほどね。そんな感じがするな」

みんなは納得し、飯島も彼がどんな人間か心得て付

き合うようになり、そして彼の三大巨悪として分析したものだつた。

① 言つていいことと悪いことが区別できず、したがつて幼児的な自然主義者である。

② それ故に生まれながらの精神構造を無意識的にさらけ出し、何かと人と比較する傾向があつて、言うならば差別的な体質の持主である。

③ 格好をつけたがるポーズの人である。

年月が経つた今も、飯島の頭をよぎるのは、皆で伊香保温泉に旅行した時のことである。これほど腹の煮えくり返つたことはない。大げさに言えば気が狂いそのうになつた。小山田はどこかのグループと殴り合いの喧嘩をし、飯島も巻き込まれて騒動になつた。その割には早く収まつたが、酒に酔つていた小山田は興奮してまだやるのだと主張し、いくら説得しても聞かなかつた。連中に腹を立てているというよりも、幼児の特権であるかのように駄々をこねているのだつた。子供が母に対して泣き続け、泣く力がなくなつてもわざとアーンと声を張り上げているのに似ている。これほど薄汚い振舞いはない。何時までも止まないから殺してやりたいくらいだつた。それらのことが後遺症として今も体に染みこんでいる。友人というより親友とい

うオブラートに包んできたが、表皮が破けて深層心理がより一層見えて来た。先輩であるがゆえに遠慮してきたが、もうそんなことはする必要はないのだ。

「お前なんかとは絶交だ！」言つてやつてもいい。その一方で、怖いもの見たさというか、誘われれば付き合つたのだから飯島もどうかしている。

社会に出て何年かした頃、彼らと浅草で飲んだことがある。映画研究会の横井に誘われたからだ。新仲店通りの路地を入つた所にある飲屋で、カウンターに座ると満杯になってしまう広さしかない。

中年のママは優しくてどことなく母親的なものを感じさせた。三人ともウイスキーサワーを飲みながら世間話をしていたら、他の客が来た。ママが席を外すと案内役の横井が自慢げに言う。

「なあ、ママはセクシーだろう」

「ポツテリした体つきがいいな」小山田が相槌を打つ。「ドサ回りのストリッパーみたいだな」飯島がからかう。

三人ともかなり好色になっていた。そんな話をしてから飯島が横井に、「理恵さんのお腹は順調かい」尋ねた。細君は妊娠して五ヶ月になる。

「まあ、どうか…ただ神経質などころがあるけど

な」横井がわずかに眉をしかめた。

「どういう風に？」と小山田。

「相当嫉妬深くてね。ちよつとしたことで目くじらを立てるね」

「身ごもっているからナーバスなのかな」飯島が言った。

「それもある」横井が言う。「俺が隠れてポルノDVDを観るだけで嫌がるよ。それどころか妄想するだけで非難されるからな」

「男は無神経だからな」

「そうだよ。女の気持なんか、分からんよ」飯島と小山田は同じ意見だった。

「そうだ、妻が小山田さんと話したいと言つていたよ」

横井は家に誘いたいのだろう。

「そうかい、いつでもお相手するよ」

「今日にでもちよつと寄つてよ」

「うん、いいよ」小山田は気のいい返事。「飯島も付き合うだろう。横井は映画関係の資料をたくさん集めているから、見せてもらえよ」

「ああ、見たいね」

「蒐集しているだけで、読んでいないけどな」

三杯目を飲んでから浅草駅に向かった。横井は曳舟に住んでいる。東武伊勢崎線のホームで電車を待った。小山田の近くに立っていた飯島は危ない：とそこを離れた。学生時代に酒を飲んだ帰り、ある駅のホームに立っていたら、酔った小山田が突然飯島の股に潜り込んできて暴れ出した。ギョツとしてベルトを掴んで思いつき身体を放した。電車がすべり込んできたら危険極まりない。何事もなかったが、飯島は激しい怒りにかられた。

「何をするか！」

小山田の膝にけりを入れた。彼は膝を抑えながらしやがんだ。いくら酔っていてもこんなおふざけは我慢ならず、腹立ちは収まらなかった。本人は無邪気なコドモのつもりでいる。

「君のしたことは、殺人未遂だ。警察に行こう」

「謝るから」

頭を下げたから仕方なく見逃した。しばらく不仲になったがいつの間にか元に戻った。しかし小山田と電車に乗るのは避けるようにした。横井の家は曳舟駅から徒歩で十四、五分ほどかかり、住居は四階建てのマンションの二階にあつて、細君がマタニティドレス姿で迎えてくれた。居間に通され、ソファに座った。

「いつ来ても、綺麗にしていますね」小山田が如才なく褒めた。

「いらつしやるんだったら、お掃除しておいたのに」理恵がはにかんだ。

「いいえ、おかまいなく」飯島も言葉を添えた。

「理恵さんが元気だから、よかった」

「よく食べるし、よく寝るし、健康そのものだ」亭主もにこやかな表情。

「生まれる子が女の子でよかったなあ」

「俺、男の子だったら、がっかりしたろうな」

「どうして、女の子にこだわるのかね」

「息子とライバルになって、家の中で競争するのがいやだからさ」

「その気持ち分かるなあ」

「奥さんはどっちがいいですか」

「私はこだわりません。でも横井が望むなら、女の子でよかったです」

「何よりも五体健全であれば、由としなきや」

飯島が締めくくった。それから映画関係の蔵書の話になり、横井が思い出して、「あつちに行こうか」飯島を促し書斎に案内した。小山田は何度も見ているから関心がないらしい。八畳くらいの洋間に書架が四架

ほど壁際に並んでいて、ぎっしり詰まっており、またDVDの収まった棚も壮観だった。端から背文字を大ざっぱに見て、食指の動く本を手に取って拾い読みしたりした。横井は映画に関する本を書きたいと話しているのを前に聞いたことがある。

「今、書いているのかい」

そう尋ねながら横井に文才があるとは思えないなど思った。

「まだ先のことだね」横井が言った。

「書くとしたら、どういう分野なの」

「堅い論じゃなくて、映画の雑学みたいなものだ」

「面白そうだね」

「今はもっぱら集めるのが楽しいよ」

将来はどこかに寄付しようかと考えているようだ。

そんなところだろう、大してレベルは高くはない。飯島は彼女が女たらしの傾向があつてどうしても好きになれない。俺は如何にもモテ系だぞという自惚れも鼻につく。十分ほど喋って居間に戻ると、小山田が理恵と笑いながら喋っていた。理恵が夫を見上げながら言った。

「あなたがモテる話を聞いたわ」

横井が手を振りながら否定した。「そんなことはな

いさ」

「新しい情報もあるのよ。いけない人ね」一瞬理恵の表情が強張った。

「何でもないよ。アハハハ」

他愛ないやり取りがあつて、横井は笑いにまぎらわした。それから二十分ほどいて遅くなるのは迷惑だからといとまを告げた。夫婦は玄関で愛想よく見送ってくれた。

「いい奥さんだよな」小山田はタバコに火をつける。

「ああ、よくできた奥さんだな」と飯島。

「飯島も早く恋人を見つけて結婚しろよ」

「そうありたいよ。ところで、小野康子さんはどうしているの」飯島が興味深く聞いた。

小野康子は共通の女友達だが、なかなかの美形で、丸の内の会社で働いている。

「彼女は横井といい仲だよ」と小山田。

「エッ本当かい。ひどいなあ」飯島は驚いて不愉快になったほどだった。

「奴はそんなこと平気だよ」

「バレたら大変なことになるぜ」

「奥さんは案外寛大だと思うな」

「馬鹿なことを言うな。ああいう性格だ、分かったら

ショックを受けるぜ」

「そうかなあ」

小山田の鈍い反応に苛立った。飯島は康子に無関心ではなく、できたら恋人にしたかったが、先を越された訳だ。いつだったか小山田に、

「お前、嫌味な顔つきをしているから、女に敬遠されるタイプだな」指摘されたことがあった。「それに……」同席していた友人が付け加えた。「ものの考え方が型通り過ぎるな」

「それは違う。俺はこれでも柔軟性がある方だ」

反論したら友人は首を振っていた。飯島は本意である。そんなふうに見られるが誤解でしかないと反感を持った。家の後継ぎに捕らわれていて、無意識にい子になっているのかもしれないが偏見で見られるのは耐え難い。康子と縁がなかったのもそういう自分と関係があるのだろう。

ある日、痛ましい事故が起こった。こんな悲惨な出来事はないだろう。理恵が界隈のマンションから投身自殺をしたというのだ。母子ともに即死だった。小山田からその話を聞いた時は、言葉を失い胸がふさがった。葬儀に出席し、横井を慰めたがぼんやり虚空を見ているだけで返事もしなかった。帰る時に声をかける

と泣いていた。

「氣を落とすな」

皆は平凡な言葉しか口にできなかった。曳舟駅に向かいながら小山田はしきりに煙草の煙を吐いた。

「幸せそうな女性が突然この世からいなくなるなんて信じられない」飯島も涙が出た。

「マタニティブルーだろう」小山田はありきたりの答えを出した。

「それだけじゃない、決定的な理由があるはずだ」飯島はある理由を疑っていた。

「決定的な理由と言っても俺には分からんなあ……」小山田はそれ以上頭が回らないらしい。

「横井は康子さんの件で、何か言っていないかったか」飯島が聞いた。

「特に聞いていないね」小山田はいやにのんびりしている。

電車に乗り、浅草まで出て春日部で小山田と別れ、一人になると疑惑に取りつかれた。あの日、飲屋で飲んでから横井家に立ち寄った時、小山田と理恵が二人だけになった時があった。そこでの二人の会話が気になってならない。まさか、

「横井君はもつぱら、康子さんという女性に夢中です

よ」

などと漏らしはしないだろうな。もし、そんなことがあったら、理恵は相当ダメージを受けるだろう……：勝手な推測だが、あり得ないことではない。黙って見過ごすわけにはいかなかった。

飯島は家に帰って夕食を食べて落ち着いた頃、小山田の家に電話をかけた。

「小山田さんに聞きたいことがある。気分を害さないで、素直に答えてよ」

「一体、何だね」

「理恵さんのことだけど、彼女は夫に女がいることを知っていると、絶対と思うよ。絶対にそうだ。ずばり聞くよ。

横井の家で、小山田さんが理恵さんと二人だけになったことがあったろう。あの時、小野康子さんの名前を口にしなかったかね」

「いや、そんなことはないと思うな」小山田の口調は曖昧だった。

「そうかなあ」

「記憶なんていい加減だよ」

「本当に言わなかったのかね。よく胸に手を当てて考えてよ」

「思い出せないな」

小野康子の存在を知っているのは、横井のほかにも小山田しかいない。ひよいと口にしたんじやないかと飯島は見ている。けれど小山田は無意識人間だから忘れていただけではないのか。この際、その点を率直に指摘した。

「いや、記憶にないね」

「あるはずだ」

「ない、ない……」

飯島は小山田の鈍感そうな受け答えにイラつきながらもとと追求したかったけれど、これ以上は踏み込めなくて、一般論として言った。

「不用意な、無神経な言葉は凶器になるから、気を付けた方がいいぞ」

「飯島って大げさだな」

「大げさじゃないよ」

「この際、横井にも聞いてみな」

「その気になったらな」

飯島は重苦しい顔つきをして電話を切った。その話はいつまで経っても忘れられない。疑い続けているうちに、だいぶ以前に観たフランスの女性監督アニエス・バルダの『幸福』と重なった。

ある日、家族でピクニックに行き、主人公が妻に郵



便局に勤めている恋人ができたと打ち明け、許しを求めると妻は、「あなたがそれでよければいい」と答える。単純な夫は、

「嬉しいよ。幸せが二倍に増えた」

無邪気に喜んだ。しかし妻はその告白にショックを受け、その日に入水自殺をするのだが、本人も周りの者も気がつかず、事故と捉えて処理する。主人公は皆から同情され、やがて祝福されながら再婚する。無意識の殺人である。こんな痴呆みたいな人間はどこにいるだろう。小山田も、とんでもない言葉を発して友人の妻を死に追いやったのではないか。二人ともハンサムで甘い顔つきをしており、ゾツとするほど似ていて脳に異常があるのではと思ってしまう。

それから長い年月が経って、皆はいっぱしの大人になつた。

晩秋のある日、乃木坂で開かれている美術展を観に行った。妻の友人が招待券を送ってくれたからだ。画家の夫の絵はユニークで好奇心を抱かせた。勤め人達の朝の出勤風景だが、皆骸骨で度肝を抜かれた。しかし意外にリアル感があった。その一点だけ見て外に出ると、出入り口近くのベンチに女が一人で座っていた。

濃いグリーンダウンジャケットを着ていて猫系の顔つきをしている。飯島は歩きながらいつまでも見ている自分にハツとして、無礼を詫びるつもりで軽く会釈した。向こうもつられて頭を下げた。飯島は戻って行き、言葉をかけた。

「ジロジロ見つめてごめんなさい」

「変な人が歩いていてと思ったわ」

「あなたも展覧会を見て来たの」

「そうよ」女は屈託なさそうに答えた。

「いい作品はありましたか」

「なかつたわ。退屈してお腹が空いちやつた」

「それだったら、一緒に食べに行こうか」

「私、お金持っていないもん」

「お金は僕が払うから、気にしなくてもいいよ」

飲みながら食べることにして、料理を出す銀座のバーにタクシーを拾って行った。彼女は広中麻里と名乗った。麻里は飯島の名刺を手にながら、

「部長なんて偉いわね」

「親父の会社だからだよ。力があって出世したわけじゃない」

「きつとお金持ちでしょう。お金があるから、女の子をナンパしたりするでしょう。私を見た時の目つきも

怪しかったわ」

「そんなつもりはない」

「隠さなくてもいいよ。あそこは大きいの」

変なことを聞くからドキリとした。さらに麻里は言葉を継いだ。

「私とやりたいの」

運転手の手前、戸惑って、「君はいくつ？」話題をそらした。

「二十六よ」

「ほう、若くていいね」

「前は化学工場の実験室に勤めていたの」

ということは目下失業中なのだろうが一応前の会社の名刺をくれ、その裏にスマホの電話番号を書いてくれた。面白そうな子だなと興味が湧いた。しかしこれ以上話をさせないように飯島は運転手に今日のニュースを聞いていないからと、ラジオをつけさせた。ラジオはアメリカの戦争で、兵士が戦場で頭を撃たれて死期を迎えているのに殺さないで生かしておいたから苦しめたことが取り上げられていた。こういう場合は殺すのもやむを得ないという意見を述べている。飯島はそういうこともあるだろうなと何となく思った。ニュースを聞きながら銀座の目的地に着いた。細長いカウ

ンターだけの店で、グレー基調の物静かな雰囲気心地良さを感じさせる店だった。ホステスは何人もいたが、馴染みの女は遠慮してくれた。最初に和牛ステーキを食べながらウイスキーの水割りを飲んだ。麻里の空腹を満たすために次々と頼み、フォアグラも食べたと言うから注文した。また言われるままにズワイ蟹や特選野菜なども取り寄せた。

「飯島さんは不倫しないの」

「妻一人で満足しているよ」

「つまらない人ね、道徳的な男って嫌いよ」

後継ぎは信用が第一だから、恥さらしの真似はするなど言われている。彼はそれを忠実に守っている。

「何が楽しくて生きているのよ」

「仕事が一番楽しいね」

「ふーん」

「じゃあ、君は何が楽しいの」

「そうね、人を殺したら楽しいと思うわ」

「アハハハ。僕を脅かそうとしているわけ。嘘っぽいな」

麻里も飯島も酔って来た。初対面同士の緊張感も恥じらいもなくなり、盛んにウイスキーのお代わりをした。

「あなた、本当に妻以外の女と寝たことないの」

「ないね」

ただ好色なホステスがいて、カウンターの下で悪さをされたことが二、三度ある。場を持たすためにその話をした。気持ちよかったかと聞くから、よかったと答えた。麻里はやっぱり男ねえと感心した。飯島も酔っていい気分だった。

「私もお酒がまわって来たわ」

酔うと本心が出て来そうになり、また人を殺したくなるのだと言う。

「あなた、そう思ったことはないの」と聞かれた。

「そりゃ思ったことはあるけれど、いくら何でも実行したいとは考えたことはない。そんなことをしたら人生おしまいだからさ」

「空想で殺したい人はいるの」

考えたことはないが、人物の名前が浮かんだ。やはり何と言っても小山田宏をおいてない。ついこの間、元映画研究会のメンバーが久々に集まって飲んだ。太っているのや、髪の毛の薄くなったのや、人相の変った中年男が七、八人顔を揃えた。飯島の所に顔を出した小山田が、

「最近、全然収穫がないよ。いい女はいないか」

怪しげな呂律で話しかけて来た。

「俺のような聖物に聞かれても困るよ」

「でも、お前、癖のある顔つきは直ったな」

「そうか。俺もモテるようになったのかな」

「モテても口説かなきゃ意味ないね」

じゃあ、知り会ったら小山田さんに譲るよと冗談半分に言うと、それなら有難いがね、楽しみにしているよ：そんなやり取りをしたことを今思い出した。

「そいつ、けっこうイケメンでね、女にモテやがる」

「私、イケメン、大好き。どんな容貌しているの」

「背は、一メートル七十五センチ以上はあったかな、色白で目鼻立ちも整っていて、一見して白人っぽいな。ただね、幼児的なのが欠点だ」

「わあ、可愛い感じ？私のタイプかもしれない。紹介して」

「嫌だね。あんな野郎に、いい思いをさせたくないよ」

「いいじゃないの、お願い」

「断る」

「私、話を聞いただけで、たまらない気持ちになるの。お付き合いてみたいわ」

小山田にも紹介するようなことを言ったが本音では

ない。麻里は執拗にせがみ、引つ込めようとはしない。小山田の外観は女心をそそのが、一度寝ると嫌われる傾向がある。恐らく人格を下げるようなことを平気で口にするからだろう。男は射精した後というのはエネルギーをすべて吐き出して、放心状態になり、人が変わったようになることがある。特に小山田は虚脱感を覚えると、何を言い出すか分からない。無意識のゲスになるのが目に見えている。「最低ね」女に言われそうだ。飯島はそういう例をいくつも知っている。麻里だつて同じように一挙に幻滅して怒りに駆られるかもしれない。それなら思う壺である。そうなるのだから紹介してもいい。

「分かった。会わせてあげるよ」

根負けしたように言うのと、「やったあ」麻里は大喜びした。それからは酔いに任せて喋りまくり、何を言ったか覚えていない。帰る時はタクシーで麻里を品川まで送り、運転手に自分の行先を告げてから正体不明になつて眠ってしまった。

三、四日した頃、小山田に電話をして、麻里の連絡先を教え、勝手にやってくれと言ひ添えた。やがて二人から前後して電話がかかつて来て、初対面で気が合

つて付き合うようになり、うまくいっているとお礼の言葉まで口にした。小山田は例のごとく、すぐに振られるだろうと見ていたが、そうでもなかった。

一ヶ月二ヶ月経つても、二人の関係は継続していた。仕事が多忙になり、そのうち関心を失つて、他人の色事などどうでもよくなつた。そう思いながらも小山田の細君とゴタゴタが起りかねないから、そろそろけじめをつけろと忠告してやるうかと思つていた。その矢先に麻里から電話がかかつてきた。

「あんな馬鹿、顔を見るのも嫌になつたわ」

すごい剣幕だつた。小山田はとうとう実体を暴露したのだろう。

「嫌な奴と付き合うことはない。即座に別れればいい」

「もちろん、そうするわ」

「簡単なことだ」

「そうね、訳ないことね」

飯島はせいせいして電話を切つた。第三者が余計な心配することもなくなつた。ところが、それから一週間ほどして小山田から恐るべき電話がかかつてきた。

「俺はあの女から、毒を盛られた。毎日激痛に悩まされている。警察にも訴えた」小山田は苦しい声で伝

えた「ああ、痛い。猛烈に痛い」

「だけど、麻里とは限らないだろう」

「麻里しかない。飲んでいる時に何かを入れられたんだ」

医師はナトリウムが検出されたと分析しているそうだ。それはないだろう……と飯島は口で否定しながら、犯人は麻里に違いないと考えた。彼女は化学工場に勤めていたから毒のある薬品くらいは秘匿しているだろう。いつかそれで人を殺そうと考えていたかもしれない。愛が覚めて相手の欠点が鼻について来たのだ。小山田の欠点は言うまでもない。

やがて警察から連絡があり、任意出頭を命ぜられた。麻里はすでに逮捕されて拘留所に拘留されている。担当の刑事は五十がらみの穏やかそうな話し方をする男である。

「あなたに色々とお聞きしたいことがありますね」

飯島は興奮を抑えながら何でも聞いてくださいと答えた。質問されるままに麻里のこと、小山田のことについて話した。小山田の時はまるで心理学者のように明晰に語った。話し方が熟成していて、練れており、自信に満ちていた。

「よくご存じですね」

「長年の友人ですからね」

彼は胸の中のを吐き出して満足感を覚え、余裕ありげに笑みさえ浮かべていた。こんな気持ちのいい思いをしたことはなかった。

「話す機会を頂いて、感謝しております」

「それはよかったです」

「今後とも、どんなことでも申し上げます」

「お願いします。ところであなたは被害者を、どんな残酷な手を使ってもいい……と唆したそうですね」

さすがの飯島も急激に目の色が変わった。

「いや、そんなことは一言も口にしていません」

「しかし、広中麻里はそう申しておりました」

「そんなのは真つ赤な嘘です。彼女は素面でも、人を殺してみたいというほどの性格をしておりますから、自分の意志というよりも、殺意以前の無思考でやったのです」

「そう、そこです。その際、あなたも酔っていて、それだったら小山田君を殺してやってくれないか。自分にはできないから。その代り二百万円払うからと約束したそうじゃないか」

「覚えておりません」

「相当飲んでいたようだね」

「はあ、その通りです」

「今は飲んでいないから、冷静になって思い出せるよね」

「さあ、どうですかねえ」

しかし、普段から無意識下に沈んでいる憎悪や復讐心を想起し、言語化すれば酔った時の言葉を再現できないことはない。そう考えるとパツと小山田の言動が浮かんできて、激情に駆られそうになった。飯島は思わず体を前後左右に動かし始めた。その雰囲気を探した刑事はやりわりと制した。

「飯島さん、落ち着いて」

「私はいいつを心から憎んでいます。紛れもない殺意がありました。いや、殺意以上のものです。仮にピストルで撃って即死させるよりも、治療不能の重傷を負わせて、三十年も四十年も苦しめてやりたいと考えているほどです」

飯島はつい奥底にあるものを口にしたが、本人は気がついていなかった。

「酔った時もそういう考えだった訳だね」

「それは何とも言えません」

「分かった」

「ところで刑事さん」飯島は気になっていることを聞

いた。「小山田の怪我は治るのですか」

「それは専門家でないと何とも言えません」

「しかし、苦しんでいるのは確かですね」

「それはそうだね」

「どうか死なせないようにして下さい」

「もちろん、医師達は最大限の努力しております」

「もし、彼が死んだら土葬にして頂けませんか」

「何を言うかね、日本の法律ではそんなことは出来ません」

「私は、奴が死んだ後も墓場から引つ張り出して、殴る蹴る、千切るの、乱暴をしてやりたいのです」

飯島はエスカレートしてむき出しになってきた。

「あなたは相当いかれているね」

「いや、あいつの方が異常です。あんな邪悪な人間はいません。お蔭で私は辛い思いをしました。たとえばですよ：自分は無意識的に何十回、何百回も侮辱的な扱いをされたか、そのために気がおかしくなりそうになりました」

いちいち例をあげ、長々と喋ったからか刑事は何度も欠伸をした。飯島は飯島でつい興奮して、クソッたれの馬鹿野郎など叫んだりするのだった。

「君、落ち着きなさい」

「私は狂ったわけではありません。一過性のものだから、大丈夫です」

刑事は最後に告げた。「近々、精神鑑定を受けることとなります。その時はまた呼び出しますから、協力してください」

飯島は警察署の建物を出ると、長年の重荷を肩から下したような気になった。次の日、大宮市の大きな病院に入院している小山田を見舞った。彼は三階の病室のベッドで苦しげな息を吐きながら横たわっていた。

「俺も事情聴取を受けて、色々聞かれた」飯島は報告した。「きつと罪名がつくだろうな」

「迷惑をかけたな」

「構わないよ。それより、小山田さんはどうだい、少しはよくなったかい」

「全然、治らないな。こんな辛い思いするなら死んだ方がましだ」

「いや、死なないでくれ。死んだら元も子もないからな」

「俺は生きていたくない」

「現代の医学で必ず治るよ」

「しかし、俺に効く薬はないそうだし」

「そんなことはない、大丈夫だ。氣を確かに持てよ」

「心配して見舞いに来てくれるのは、君だけだ」

「俺は誰よりも関心を持っているからな」

「有難う。でも、この先、どうしていいか分からないけどな」

「俺だって、似たようなものさ。家の者は相当怒っている。とにかく時々見に来るから」

「歓迎するよ。病人は孤独だからね」

「じゃあ、失礼する。お大事に」

病院を出て歩いていると、何となく切ない気持ちになった。

自宅に戻ると、父が、「お前は平社員に降格だ。今後出世はないからそのつもりでいてくれ。健二に後を継がせるよ」そばにいる弟を指差した。

「なんて、馬鹿なことをするんだ」

父は言い足りなくて更に非難した。文江は哀れな目つきで弟の飯島を見つめながら言った。

「あんたはお友達の小山田さんと同じようなものね」妻は夫婦の寝室で泣いていた。飯島は孤立無援で会社や家の中ではぼつんとしているばかりだった。彼は自分を何とかしなければと思うのだが、今はどうにもならなかった。

初稿みなせ79号2018年8月